

コミュニケーション関係学分野

第1節 コミュニケーション関係学教育における学士力の考察

コミュニケーション関係学は、人間社会の営みを円滑に維持・発展させることを目的として、個人や集団、組織や社会、文化におけるコミュニケーションの役割と仕組み、メディアにおけるコミュニケーションの特性を探究することを使命としている。

コミュニケーションは我々の社会の根幹となる行為であり、人間社会を営む上で価値観を共有し、意思の疎通を図るために基本となるシステムである。「ヒト・モノ・カネ・情報」が国境を越えて移動するグローバル社会では、日常生活から経済活動、外交に至る様々な場面にふさわしいコミュニケーションが求められている。とりわけ、メディアが多様化する中で新たなコミュニケーションの形態が登場し、便利さを享受する反面、今まで経験したことのない様々な現象や問題を惹起している。このような背景から、コミュニケーション関係学教育では、豊かな人間社会の営みに寄与することを目的として、グローバル化時代に対応したコミュニケーションの在り方を主体的に模索できることを目指した。

そこで、コミュニケーション関係学教育における学士力の到達目標として、以下の三点を考察した。

第一に個人や集団、組織、社会、文化におけるコミュニケーションの役割・仕組みを理解できること、第二に多様な場面において期待されるコミュニケーションのスキルを活用できること、第三にコミュニケーションの諸事象・諸問題を分析した結果を理論的に考察し、様々な状況、異なる分野で応用できる。

【到達目標】

1 個人や集団、組織、社会、文化におけるコミュニケーションの役割・仕組みを理解できる。

ここでは、場面・状況に応じたコミュニケーションの理論、基本モデルやメカニズムを理解させねばならない。そのため、コミュニケーション関係学の知識を体系的に修得させ、コミュニケーションに関する理論を踏まえながら、様々な次元でのコミュニケーションについて説明できる能力を養うことを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

コミュニケーション概論など

【到達度】

- ① 対人関係をコミュニケーション論的視点から理解できる。
- ② 集団や組織における活動をコミュニケーション論的視点から理解できる。
- ③ 社会、文化事象をコミュニケーション論的視点から理解できる。

【測定方法】

- ①～③は、コミュニケーションのメカニズムを筆記試験、レポートなどにより確認する。

【到達目標】

2 多様な場面において期待されるコミュニケーションのスキルを活用できる。

ここでは、コミュニケーション理論を生活の中で活用できるようにするため、様々な場面や相手に対応したコミュニケーションの手段を選択させ、最適な技能を用いてコミュニケーションを実践できるようにさせねばならない。そのために、実際のコミュニケーションを体験できる活動を設定し、その中で適切な手段を選択し、ふさわしい技能を用いる能力の養成を目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

コミュニケーション手段の選択、ロールプレイング、プレゼンテーション、スピーチ、ディベート、グループディスカッションなど

【到達度】

- ① 場面や社会的・文化的「文脈」に応じた適切なコミュニケーションの手段を選択し、使用できる。
- ② 相互理解を深めるためのコミュニケーションスキルを活用できる。

【測定方法】

- ①～②は、学生が互いのコミュニケーションを客観的、理論的、批判的に観察し、その結果を発表や討論させることにより教員が確認する。

【到達目標】

3 コミュニケーションの諸事象・諸問題を分析した結果を理論的に考察し、様々な状況、異なる分野で応用できる。

ここでは、コミュニケーションに関わる諸事象・諸問題を考察させ、これまで学んできた理論と技能を活用し、自ら設定した課題から得られたコミュニケーションの仕組みを実際のコミュニケーションに活用できるようにさせなければならない。そのために、分野に応じた課題を選択させる中でふさわしい研究の方法論を用いて調査・分析し、得られた仕組みを実践できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

コミュニケーションにおけるメディアの機能・特徴、メディアリテラシー、メディア論関連、マスコミュニケーション論関連、言語と非言語コミュニケーションの機能、対人、集団、組織、異文化間などにおけるコミュニケーションの特性、対人コミュニケーション関連、集団・組織コミュニケーション関連、異文化間コミュニケーション関連など

【到達度】

- ① コミュニケーション関係学関連の理論と技能の観点から、コミュニケーションに関わる諸事象・諸問題を発見することができる。
- ② 諸事象・諸問題を考察し解決するために体系的にデータ収集・分析し、コミュニケーションの仕組みを提示できる。
- ③ 異なる文化・社会的文脈などを背景としたコミュニケーションの関係性作りや行き違いを解消するために、コミュニケーションの仕組みを応用できる。

【測定方法】

- ①～③は、研究発表、プレゼンテーション、卒業研究などにより確認する。

第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル**コミュニケーション関係学教育における教育改善モデル【1】**

上記到達目標の内、「個人や集団、組織、社会、文化におけるコミュニケーションの役割・仕組みを理解できる」、「多様な場面において期待されるコミュニケーションのスキルを活用できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 対人関係をコミュニケーション論的視点から理解できる。
- ② 集団や組織における活動をコミュニケーション論的視点から理解できる。
- ③ 社会、文化事象をコミュニケーション論的視点から理解できる。

- ④ 場面や社会的・文化的「文脈」に応じた適切なコミュニケーションの手段を選択し、使用できる。
- ⑤ 相互理解を深めるためのコミュニケーションスキルを活用できる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

従来的一方通行の講義のように知識を伝達するだけでは、学生が多角度からコミュニケーションを理解し自ら考え、行動する実践的なコミュニケーションの力を身につけさせることが困難であった。

ここで提案する授業では、体験の中からコミュニケーションに関連する課題の設定を行わせ、解決に必要な知識を自ら獲得させることで知識の活用力の修得を目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、初年次から2年生を対象とするが、さらに上級学年生においてコミュニケーション実習として、企業・社会でのインターンシップを経験させることでコミュニケーション力を振り返らせ、新たな課題を見つけ出して解決策を考察させる。

2.3 授業にICT*を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する（図）。

- ① 対面やネット上における対人関係の経験をもとに、コミュニケーションを考えるための問題設定をする。
- ② 社会的、文化的な場面にふさわしいコミュニケーションとは何かをグループで学修し、学修成果をネット上に掲載する。グループ間で相互評価を行うことにより、多様な意見の中から教え合い、学び合いをさせ、その中で関連するコミュニケーション論の知識を修得する。
- ③ 学んだ成果の実践の場としてインターンシップを体験させた上で、新たな課題の洗い出しを行わせ、自ら考察した解決策をネット上に掲載して、多様な評価を得ることで学修成果を検証する。

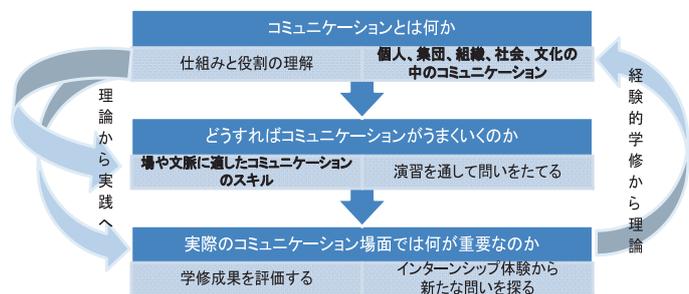


図 授業のシナリオ

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 「コミュニケーションのコンテキストが変わると、伝え方や受け止め方がどのように変わるのか」、「ネット上のコミュニケーションツールが変わると伝え方や受け止め方がどのように変わるのか」などを対人関係、集団組織、社会・文化の文脈に応じたコミュニケーションの在り方についてグループで議論させる。
- ② 学生が必要と考えるコミュニケーションに関する知識・技能を体系化し、課題の解決に必要な最適な解を発見させる。ファシリテーター*を導入して学生の課題に適した学修支援を行う。
- ③ 学修成果を対面やネット上で発表させ、グループ間で相互評価を行わせる。
- ④ インターンシップでは、修得した知識・技能と実践とのギャップに気付かせ、新たな課題と解決方法を認識させる。その上で、これらの学修成果をネット上に掲載して、発展的なグループでの学修につなげる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① 学びのプロセスを時系列で記録し、協働学修の発展的な学修のリソースとして活用できる。

- ② 受け身的な学びから主体的な学びへと習慣化させることができる。
- ③ 教員と学生、社会を含めた総合的な学びの場を創生できる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 教員同士や社会との連携を実現するプラットフォーム*が必要となる。
- ② 学修を支援する上級学年生のファシリテーターが必要となる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業では、学びのプロセスを点検・評価するシートと学修ポートフォリオ*などを組み合わせて、担当教員及び関連教員間で点検・評価する。点検・評価を通じて、授業の振り返りを行い、知識の活用力、人間力、課題解決力などの視点から主体的に学ぶ教育課程の在り方、学修支援の仕組み、教員連携や学外の有識者との連携体制などについて改善策を考える。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① インターンシップ先との連携を大学がバランズで実現することが必要となる。
- ② 学修を支援するファシリテーターを制度化し、その養成方法や指導法に関する研修が必要となる。

コミュニケーション関係学教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「コミュニケーションの諸事象・諸問題を分析した結果を理論的に考察し、様々な状況、異なる分野で応用できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① コミュニケーション関係学関連の理論と技能の観点から、コミュニケーションに関わる諸事象・諸問題を発見することができる。
- ② 諸事象・諸問題を考察し解決するために体系的にデータを収集・分析し、コミュニケーションの仕組みを提示できる。
- ③ 異なる文化・社会的文脈などを背景としたコミュニケーションの関係性作りや行き違いを解消するために、コミュニケーションの仕組みを応用できる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

メディアの多様化と技術革新の中でメディアの特性を知ることなく、単にメディアを使用することがコミュニケーションだと考える世代が出現している。しかし、現状では経験主義的な教育が散見され、メディアの特性の理解と目的に応じた利用法などのコミュニケーション教育は多くない。

ここで提案する授業では、メディアの特性を理解した上で、メディアとメディアを用いたコミュニケーションの可能性と限界を認識しながら主体的に活用する能力を身につけさせることを目指すこととした。

2.2 授業の仕組み

ここでは、卒業するまでの学修期間を通じた授業改善モデルであり、特定年次をイメージしたモデルではない。4年間を通じて、関連する科目の中で様々なメディアを実践的に活用するために教員同士の連携が前提となる。

また、学生にメディアの可能性と限界を体得させるために、演習やグループワークの中で現代のメディアをめぐる仕組みや社会的制度について理解させた上で、学修成果を発表する。さらに、教

員有志のコンソーシアムや社会に評価を問うことで到達度を確認する。

2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する(図)。

- ① メディアとメディアを用いたコミュニケーションの特性についてグループや協働で学修を行う。
- ② 学修活動の内容を情報共有するため、学修支援システム※に学修プロセスを掲載する。
- ③ 自分たちの生活の中にあるメディアを用いたコミュニケーションについてケーススタディを行う。

例えば、国内外のニュース報道・映像メディア・ネット上のコミュニケーションなどの内容分析と異なるメディア間の比較分析などを通じて体験的に学修させる。

- ④ ICTなどを活用してメディア作品をグループなどで制作し、作品の相互評価を行い、外部評価を受ける。

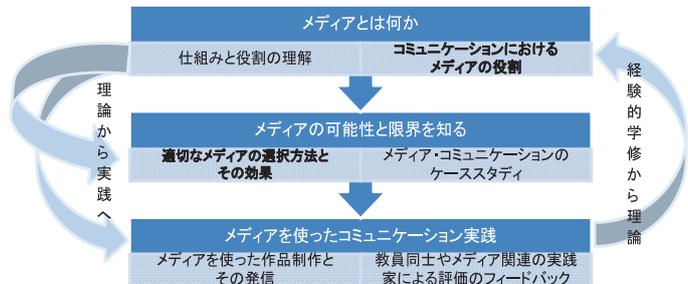


図 授業のシナリオ

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① メディアの発達過程を踏まえて、現在または将来予測されるメディア及びそのメディアの中で展開されるコミュニケーションの可能性と限界についてグループで整理させる。
- ② コミュニケーションにおいてメディアをどういう場面でどのように使うことが適切なのか、同じコミュニケーション行為であっても、異なるメディアを使用することで伝達効果がどのように異なるかなど、「受け手」の立場からメディアの特徴について考えさせる。
- ③ ②を踏まえた上で、メディアを用いた作品制作を通じて、効果的なコミュニケーションを行う技法やメディアの特徴、表現形式がコミュニケーションにどのように作用するのかなど、「送り手」の立場から実践的に学修させる。
- ④ ①～③の学修成果について、大学間での講評を行い、その上で、社会の専門家から意見を聴取して学びの振り返りを行うことで発展的な学修につなげる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① 教室内に外部の専門家の意見を取り入れることで学びの振り返りができる。
- ② 学修活動の内容を学修支援システムに掲載しグループ間の学びのプロセスの比較ができる。
- ③ 学修成果をネット上に公表し、外部評価を受けることで学びの通用性を確認して新たな学修目標を設定できる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 教員同士や社会との連携を実現するプラットフォームが必要となる。
- ② 学修を支援する上級学年生のファシリテーターが必要となる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業では、学修成果の発表を通じて外部評価を導入し、担当教員及び関連教員間で点検・評価する。点検・評価を通じて、メディアをめぐる仕組みや社会制度について学生が主体的に関与できるような授業方法、例えば有識者などを主体としたフォーラムを企画するなどの改善策を考える。

さらに、授業を効果的に実践できるような学修支援の仕組み、教員連携や学外の有識者との連携体制などについても改善策を考える。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 教員同士や社会との連携を大学がバナンスで実現することが必要となる。
- ② 学修を支援するファシリテーターを制度化し、その養成方法や指導法に関する研修が必要となる。
- ③ 新しいメディアに対応する指導方法のFD*活動として、産学連携の中で教員が学べる仕組みを構築する必要がある。
- ④ 学外の専門家に指導や評価を依頼する場合の人材確保が必要となる。

第3節 改善モデルに必要な教育力、FD活動と課題

【1】コミュニケーション関係学教員に期待される専門性

- ① 強い使命感と倫理観を持ち、豊かな人間関係が構築される社会を実現することに貢献できる専門家であること。
- ② コミュニケーションの仕組みを理解し、実践するために様々な分野の知識を統合できること。
- ③ 個人・社会・文化などの観点から複合的視点に立って理論と実践の関連付けを行い、社会のイノベーションに関与できること。
- ④ コミュニケーションの仕組みの重要性を気付かせ、興味を持って主体的に取り組ませられること。
- ⑤ ICTなどの教育技法を駆使して、参加・対話・実践型の教育ができること。

【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① 授業のカリキュラム上の位置付けを十分に理解し、教育方針に沿った授業を実施し、さらに工夫・改善できること。
- ② 体験やグループ活動の授業シナリオを開発し、運営できること。
- ③ グループダイナミクスを理解し、授業運営に活用できること。
- ④ コミュニケーションの役割・仕組みを理解させ、実践の中で主体的学修に取り組ませられること。
- ⑤ コミュニケーションに関する様々な研究成果を学生に提示し、授業に取り入れられること。
- ⑥ メディアを取り巻く社会・文化の仕組みを学修する側の視点で理解させられること。
- ⑦ 社会に通用する授業を展開するために、関連分野の教員や社会の専門家などと連携できること。

【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

(1) FD活動

- ① 教員間の連携をもとに授業内容と教育方針との整合性の確認及び検討を継続的に行う必要がある。
- ② 教育方法に関する研究報告会に積極的に参加し、教員同士が教え合い、学び合う必要がある。
- ③ グループでの学修や対話型授業等の指導法のワークショップを組織的に行う必要がある。
- ④ 学際的な研究報告会に参加し、関連分野の教員や社会の専門家などと意見交換を行い、教育研究力を高める必要がある。

(2) 大学としての課題

- ① 大学を超えた教員連携で意識を共有化し、教育方法、教材、評価方法・基準などのプラットフォームを整備する必要がある。
- ② ICTを活用した教育方法を支援するために、大学として教育支援体制を構築する必要がある。
- ③ 関連分野の教員や社会の専門家などから協力を得るために、連携の呼びかけ、制度の整備及び財政的な支援を行う必要がある。
- ④ 世界を視野に入れた教育の質保証を持続的に行う責任がある。